

日中科学技術

No. 39

1984. 6. 20

発行所
日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島3-1-6
小宮ビル2F 電話 03 (836) 4830

第23回常任理事会についての報告

6月8日、神田学士会館で第23回常任理事会が開かれた。出席者は次のとおりであった。

(会長) 有山兼孝, (常任理事) 越智勇一, 鹿取一男, 茅誠司, 野上茂吉郎, 橋口隆吉, 渡辺武男 (理事) 弥永昌吉, 岡本道雄, 桑原万寿太郎, 藤田良雄, (幹事) 相馬胤和, (事務局長) 肥後孝

1. 報告事項

(1) 橋口会長代理の訪中報告

中国科学院の招きで4月22日から5月5日まで訪中、方毅国家科学技術委员会主任、盧嘉錫中国科学院々長、周培源中国科学技術協会主席と会見して、今後の交流計画について話しあった。

中国科学院からは、年間10名程度の本協会推薦の科学者を滞在費負担で招待したいとの申し出があった。

中国科学技術協会からも、日本人研究者若干名を招待し、大学・研究所で研究指導と講義をしてもらいたい。さらに、その日本人研究者の研究室に留学して助手的な仕事をする若い中国人研究者を、費用は同協会もちで、日本に送りたいという提案があった。葉副部長が近く訪日の予定なので、詳細についてはその際相談したいとのことであった。

また、西南物理研究所の林興炎所長を団長とする核融合視察団の訪日の希望が表明された。

(2) 援助事業審査委員会報告

(i) 中国科学技術大学への日本語教師の派遣

中国科学院から依頼を受けていた標記の件は、本協会から永井淳子女史を推薦、このたび同大学から永井女史の訪中を歓迎し、必要な手続きをとるとの連絡があった。

(ii) 南京水利科学研究院科学研究管理工作団の訪日招待

団長以下6名、8月13日から9月22日まで、訪日費用中国側負担、現在受け入れ手続き中である。

(iii) 西南物理研究所核融合訪日視察団の招待

林興炎所長を団長とする5名の訪日団が、費用中国側負担で本年秋来日の予定、本協会会長から招待状を送った。

(iv) 中国科学院紫金山天文台、葉式輝太陽部長の訪日招待

同氏が国際天文学連合第3回アジア地域総会(9月30日~10月6日、京都)に出席の後、10日間、京都大学飛騨天文台に滞在し、観測などの学術交流を行うための協会補助を決定した。

(v) 用途指定寄付金による中国留学生の招待

中国鉄道部北京市二七機車工廠職工大学教師劉曉蘭女史の、協会の用途指定寄付金制度をもって訪日旅費・滞在費を賄い、日本での1年6ヶ月間の計算機ソフトウェア技術の学習を行いたいという申請を承認し、上記機関責任者あてに会長からの招待状を送った。

(vi) 中国科学院招待の科学者の推薦(橋口会長代理の訪中報告参照)

年間約10名の推薦者の第1号として、学習院

大学小川智哉教授(結晶物理工学)を推薦した。

説明があった。

(VII) 広東省李広安副省長一行の訪日招待

副省長一行6名が関係分野の工場視察のため訪日したいので、目的達成に協力してほしいとの要請があり、協会が経済的負担等を負わない条件で招待状を送った。

(2) 昭和58年度事業報告書(案)と昭和59年度事業計画書(案)

上記収支書類とともに、原案どおりのものを総会に提出することが承認された。

(3) 中華人民共和国建国35周年 中日青年友好交流に参加する協会代表団員の決定

中華全国青年連合会などから標記の友好交流に参加する10名の青年を本協会から推薦することを要請されていたが(会報16.37, 16.38参照)、協会では会員に候補者の推薦を依頼し、その結果について審査委員会の協力を得て選考を行い、10名の協会代表団(下記の名簿参照)を決定して、日本組織委員会に名簿を通達した。なお、8月22日代表団の結成式を行う予定である。

(3) 第2回講演会

来る7月6日(金)の通常総会の後、引き続いて行われる講演会については既報のとおり(会報16.38)会員の中から講演希望者を募ることになったが、その結果、講演者と演題が次のようにきまった。なお、講演内容要旨は別項に掲げる。

「中日科学交流と協力について」

中華人民共和国大使館参事官(科学技術担当)

余 仁 泉

「音響工学を中心とした中国との交流」

東京工業大学精密工学研究所教授

奥 島 基 良

「地震学における日中科学協力」

東北大学理学部教授 鈴木 次 郎

「インスリン構造研究における日中交流の成果」

名古屋大学理学部助教授 坂 部 知 平

「以心伝心」

日本大学工学部教授 大 浜 嘉 彦

なお、講演会実行委員会委員長

は予定された橋口会長代理が当日訪中不在となるため鹿取常任理事に変更された。

(4) その他

向坊常任理事(当日欠席)から、6月末に開かれる日中民間人会議で提言すべきことについて意見があったので、この件についてさまざまの角度から話し合われた。はっきりした結論を得るに到らなかったもので、話し合われた内容を向坊常任理事に伝えることになった。

2. 審議事項

(1) 昭和58年度収支決算書(案)と昭和59年度収支予算書(案)

鹿取常任理事から、前回常任理事会以後に確定した昭和58年度収支決算額について報告し、昭和59年度予算編成の状況に関しては59年度会員減を上回る収入増額努力が必要であるとの

協会代表団員名簿

氏 名	性別	年齢	現 住 所	勤 務 先	専 門 種
寺 沢 實	男	41	北海道・帯広市	帯広畜産大学	林産化学 助 手
比 田 昌 英	男	36	東京都・調布市	東海大学文明研究所	天 文 学 講 師
清 水 莉 文	男	36	愛知県・名古屋市	名古屋大学	金属物性学 文部技官
黒 田 光 太 郎	男	34	愛知県・名古屋市	名古屋大学	金属物理学 助 手
花 井 肇 明	男	30	愛知県・名古屋市	名古屋大学	電 子 工 学 助 手
志 賀 聖 一	男	29	群馬県・桐生市	群馬大学	熱 工 学 助 手
大 川 章	男	27	千葉県・野田市	東京理科大学	機 械 工 学 大学院生
藤 崎 敬 介	男	25	東京都・文京区	東京大学	電 気 工 学 博士課程2年
森 島 繁 生	男	24	神奈川県・横浜市	東京大学	電 子 工 学 博士課程1年
三 角 圭 子	女	20	北海道・札幌市	北海道大学	農 芸 化 学 3 年

第2回講演会講演予稿

音響工学における中国との交流

東京工業大学精密工学研究所

奥島基良

私の専門は、超音波または音波を利用した計測についての研究であり、対象とする応用分野は、主として海洋学（水中音響）、土木工学、医療診断（超音波医学）であります。この分野での私と中国との交流の経過を表に示します（付表参照）。

水中音響関係では、哈尔滨船舶工程学院の黄さんの東海大学海洋学部への留学、水声物理考察団の来訪から交流が始まりました。その後、私の所属する海洋音響研究会と中国声学学会及び哈尔滨船舶工程学院との間で会誌の交換を行っており、昨年は私が訪中して特別講義を行いました。引き続き本年は、私の研究所の森栄司教授が強力超音波と振動子についての特別講義のために訪中されることになっております。

超音波医学の関係では、日本超音波医学会と中国超声波医学会との交流はかなり密であり、医学関係の専門家の訪日、訪中は度々行われています。

中国からの留学生を1名、2年間お引き受けしましたが、超音波診断装置の関係の研究を行い、学会での発表も上首尾でありました。

今年秋には、昭和57年度から発足した中国政府派遣大学院留学生が2名、私の研究室を希望して来日することになっておりますが、そのうち超音波医学の関係の希望の1名は、当研究所の上田助教に引き受けをお願いしております。

私の研究分野の関係では、交流といってもほとんど指導ということで、今後も留学生の引き受けと訪中しての指導が更に発展することと思われま

す。

〔付表〕

私と中国との交流

（水中音響関係と超音波医学関係）

1979年 哈尔滨船舶工程学院黄奎万講師東海大学
4月に留学（1981年3月まで）

6月 中国科学院水声物理考察団来日

東京工大長津田キャンパス視察
海洋音響研究会で尚尔昌氏講演

1980年 中国医学会超声波医学代表团来日

6月 日本超音波医学会（京都）に出席

7月 国際音響学会議（シドニー）出席

中国声学学会理事長 汪徳昭氏
哈尔滨船舶工程学院 周福洪教授

1981年 哈尔滨船舶工程学院造船技術考察団来日

5月 東京工大長津田キャンパス視察

8月 科学技術大学周康源講師当研究室に留学
（1983年7月まで）

11月 ME学会中国四国研究会（島根医大）で
の特別講演を徳島大学留学中の哈尔滨
船舶工程学院張占基講師も出席聴講

11月 日本超音波医学会20周年記念大会（大阪）
に中国超声波医学会代表出席

1982年 哈尔滨船舶工程学院周福洪教授・黄奎万
講師からの招聘の書簡届く。

1983年 国際音響学会議（パリ）出席

7月 哈尔滨船舶工程学院 湯渭霖講師，杭
州水声研究所 霍国正工程師

9月 哈尔滨船舶工程学院での特別講義のため
訪中。杭州で杭州水声研究所費国強
氏らと討論。

1984年 山東海洋学院研究生王寧氏（予定指導教
官奥島），復旦大学大学院学生李太宝
氏（予定指導教官上田光宏助教授）大
学院進学のため来日予定。

地震学における日中科学協力

東北大学理学部

鈴木次郎

地震学の分野での日中科学協力については、他の分野のそれと多少異なった面がある。それは中国側には国家地震局という中国内の地震学を統制している役所があり、形式的には科学技術院の指導下にあるが、実質的には独自の予算を持ち独自の活動をしている。このため地震学の科学協力に

関しては、中国科学院を通さず、直接日本の学会等と国家地震局との交流によって進められてきた点である。

当初は日本側の窓口としては地震学会がこれに当たった。最初の地震学者の交流は、1974年浅田敏氏(現東海大学教授)を団長とした3名の地震学者の訪中に始まる。この当時中国では、1966年の邢台地震後、故周恩来首相の総指揮の下に国を挙げて地震予知に取り組んだ頃であった。1975年には中国側から顧功敏博士(現国家地震局地球物理研究所)を団長とする6名の地震学者が来日した。この時は、有名な海城地震の予知が世界的話題となっており、この点が関心の的であった。さらに1977年には演者を代表とする8名の地震関係研究者が中国を訪れた。この時は、唐山地震による大被害が生じかつ所謂「4人組打倒」の直後であったが、未だ外国人が行ったことのない雲南省の奥地の大観測点にまで足をふみ入れることができた。その後1978年には、中国側からは安啓元氏(国家地震局)を団長とする視察団が来日し、また日本側からは力武常次氏(現日本大学教授)を団長とする団が訪中するなどの交流が続けられた。この頃、純学術的な目的とは少し異なるが、地震対策関係の交流として静岡県視察団(団長山本敬三郎静岡県知事)が訪中し、これに対して張進氏(国家地震局)を長とする団が静岡県に招待されている。

1980年代に入った頃、日中両国の間で、こうした視察団の往来といった形の交流だけでなく、協力して観測や研究を実施しようという気運が出てきた。このことは1981年萩原尊礼氏(東京大学名誉教授)を団長とする訪中団により中国側に伝えられた。国家地震局はこれに対して極めて積極的な対応を見せ、同年袁維丹氏(国家地震局)を長とする団が日本を訪れた際、文部省を訪問し協力研究についての意向を正式に申し入れた。日本側としては、文部省内に設置されている測地学審議会(会長永田武国立極地研究所長)の中に、新しく演者を主査とする日中研究協力検討小委員会が

作られ、日中協力に関する行政的な窓口となることとなった。

その後両国はそれぞれ協同研究のテーマを出し合う等書状による連絡が続けられたが、1982年演者が国際シンポジウム出席のため中国を訪れた際、国家地震局の幹部と演者及び尾池和夫氏(京都大学助教授)の間で2日間にわたり、協力問題について具体的に話し合った。この席では具体的な実施については多少意見の相違があり直ちに協力研究を開始するまでには至らなかったが、第一段階として両国のシンポジウムを行うこととなり、その第1回を日本で開催することとなった。このシンポジウムについては、その後の折衝と1984年初め力武常次氏が国連関係の仕事で訪中した際の話し合いの結果、本年12月東京大学地震研究所の主催で行われることとなり目下準備が進められている。このシンポジウムに際しては、中国側は、研究者だけでなく、国家地震局の幹部や事務担当者も派遣し協力研究の強力な推進をはかる意欲を見せており、今後の発展が期待される。

こうした国ベースの協力の他にも、多数の地震学関係の中国留学生が来日しており、日本からも大学院生が1年間中国に滞在して協同研究を行うとか、教授クラスの人が講義のため招へいされるとか、その他個人ベースでの協力関係は数多く行われている。このような現状から地震学上の日中協力は一層実質的発見が見られると思われる。

インスリン構造研究における日中交流の成果

名古屋大学理学部

坂部知平

ブタ2重鉛インスリンX線結晶解析の研究は、オックスフォード、北京、そして名古屋の3ヶ所で独立にしかも互いに連絡を取りながら続けられてきました。オックスフォードグループは生体活性物質のX線結晶解析により1964年ノーベル化学賞を受けられたホジキン女史を中心に40年の長い歴史と多くの優秀な人材を要し絶えず他のグループをリードしてきました。そして、北京グループ

のリーダーである梁教授も私たちも彼女の研究室に留学したことがあり、従って1977年引退されるまで彼女はこの研究のリーダーでした。北京におけるこの研究は梁教授が帰国された1966年に始まり1970年迄は北京物理学研究所を1971年以降は教授が北京生物物理学研究所へ移られたのでそこを中心として国家的事業として進められました。私たちが研究を始めたのは1968年です。丁度翌年ニューヨークで開かれた国際結晶学会でホジキン教授が 2.8 \AA の結果を次いで1970年には北京で 2.5 \AA の構造が発表されました。私たちは両者とはことなつたSIRAS法を用いて解き、結果を1972年京都で開かれた国際結晶学会で発表しました。この時、残念なことに中国からの出席者はありませんでしたが、ホジキン教授が会議の前に北京に約1ヶ月間滞在され、代わりに報告されました。そのとき見せられた手書きの見事な電子密度分布図を一晩だけ借りて徹夜で写真を撮り、それ以降永年座右に置いて参考にしました。その後、北京で 1.8 \AA 解析が完成したという話を聞いた時いつの日に行つてそれを是非見たいものだと思うようになりました。

この機会を作つて下さつたのが本協会の漆戸事務局長で1977年最初に訪中された時私たちの手紙を中国科学院に届けて下さいました。私たちが梁教授の招待を受けて訪中したのは1979年8月で1ヶ月の間に北京、大連、上海、蘇州を訪れました。私の故郷は大連ですので、特別にお願いして行けるようにして頂きました。文革に就てはあまり知りませんでしたので国家的事業のインスリンの解析までが止まっていたと聞いて非常に驚きました。その頃私たちは 1.2 \AA データによる構造の精密化を行つていましたので、遅くから始めた私たちのほうが精密化ではリードすることになっていました。そしてタンパク質構造の精密化の方法はまだ確立していませんでしたので私たちのフーリエ図と彼らのMIR図の良一致は精密化のやり方に大変自信を持たせてくれました。このほか北京では6回の講演をしましたし、結晶の作り方や強度デ

ータの集め方などに関する討論もしました。そして解析を早く軌道に乗せるにはどのようにすべきかについて、2日間に渡つて話し合いました。私たちは計算機事情を改善するのが先決だと考え、もし日立かFacomの大型計算機が北京でも使えるなら佐々木氏がもう1度訪中して私たちのプログラムを動かすことを約束しました。そのあと上海では構造と活性について議論しました。そして翌年8月佐々木氏が低分子とタンパク質の結晶解析のためのプログラムを持って再び北京を訪れ、約1ヶ月滞在してそれをフィットし使い方の手ほどきをしました。

私たちが2度目の訪中をしたのは1980年11月末でホジキン教授とブランデル教授が来られた時でした。その時はオックスフォード、北京、名古屋の3種類のフーリエ図の比較が行われ、そして精密化のやり方やそれにより得られる結果についても議論しました。滞在は1週間でしたがとても有意義でしかも前より一段と家族的な雰囲気を味わいました。昨年の夏 International Computing School を機に戴さんが研究室を訪れ、タンパク質で最も精密化された私たちの 1.1 \AA と北京グループの 1.2 \AA の構造を比較しました。そして、1977年私たちが最初にみた水素原子が彼らのD-フーリエ図でもみられ、もうそのことを疑う人はなくなりました。現在、SOR光を使って共同研究をする話がまとまり、うまくゆけば来年度からスタートできそうです。

この研究を通じて得た最も大きな成果は、良きライバルを得て競争はするが決して協調の精神を失わない平和的な学問の進め方を体得出来たことでもあります。

以心伝心

日本大学工学部

大 浜 嘉 彦

昭和55年の夏と昭和57年の冬の2回にわたつて、中国政府機関の招きで訪中し、北京、上海、南京などで学術交流を行った。主な訪問先は、建

築材料研究院, 南京水利科学研究院(所), 同済大学などである。

このように, 昭和55年夏から始まった私の中国との学术交流も, 既に, 足掛け5年目を迎えることになる。その間, 私個人に対する中国からの訪問者も年間平均して数人以上となり, 国内における学术交流も年々, 盛んになっている。今年の夏も, 南京水利科学研究院幹部の訪日が予定されている。私と中国の研究者や技術者との交流も, 昭和55年以前からのポリマーコンクリート関係論文や書簡の交換に端を発している。誠実な書簡の交換の積み重ねこそが相互の信頼関係を育み, 有意義な発展的な学术交流の礎になるものと信ずる。

私は訪中して, 又, 中国人と交際して感じたことや驚いたことが幾つかあるので, 次に挙げてみる。すなわち, (1)国民皆勉強である。(2)日本人

と中国人は顔がよく似ているので, 訪中しても他国を訪れた感じがしない。(3)国土建設に極めて意欲的である。(4)言語によらずとも, 意志がよく通じ合う。特に(4)については, いわゆる「以心伝心」ということで, 中国語でも同じ文字を用いて表すとのことである。過去15年以上にわたる私の欧米諸国の研究者との学术交流の体験からも, 以心伝心の感を持ったことはほとんどない。その理由を考えると, 日本と中国とは両方とも, ほぼ単一民族, 単一国語の国家であり, 欧米諸国のような異民族国家ではないので, 両国民は, 言葉や文章によらずとも, 心から心へ意思を伝える習慣が自然に培われているためであろう。この一つの美風を通じて, 日中両国間の学术交流が更に進展することを祈念したい。

最近の中国科学技術

中国で空からの「南水北送」の壮大な構想

〔西寧5月3日発新華社=中国通信〕中国はいま西北部の広大な地域の長期乾燥状態を改めようと, 空からの「南水北送」を行い, 黄河源流の水を増やす研究にとりくんでいる。

この構想は, 長江上流地域に流れ込む湿った暖かい南西気流を人工的に, (長江と黄河の)分水嶺のバヤンハラ山脈を越えて青海高原に導き入れ, ここに源流を発する黄河の水を増やし, さらに大きな範囲での気象構造に影響を与え, 中国北西部の広大な地域の乾燥を軽減させようという壮大なもの。中国の有名な気象専門家から成る調査チームがいまこの構想を検討しており, 先ごろ青海省東部とバヤンハラ山一帯で20日間, 行程3500キロの調査を行い, 地形, 地相, 気象, 水文など多方面にわたるデータを集め, これについての研究を行っている。

同チームの朱明道氏は, 「初歩的に観察できた状況から見ると, 人の手で湿った暖かい気流をより多く高原に導くのは可能である。しかし, これ

はきわめて壮大な事業であり, まだ解決を要する多くの難題がある」と述べている。

その方法としては現在主として, 強大な磁力による雲の動きの促進, 触媒の使用, 湿った気流の通路の疎通などが考えられている。世界では多くの国で「降水量増加計画」や「天空の水計画」が実施されているが, 「世界の屋根」の青海省チベット高原でこのような事業が進められるのは初めてのこと。

現在, 黄静波青海省省長, 羅元錚中国経済学団体連合会秘書長, 経済学者の喬培新中国銀行名誉会長を含む指導小組がすでにできており, 今年後半には多くの専門家を招き, この研究についてさらに突っ込んだ議論を進めることになっている。同時に, 青海省東部で, 低温, 多雨の標高2900メートル以上の「脳山」地区の雲水資源を人工的に, 乾燥, 高温の標高2500~2800メートルの「浅山」地区に導いてこの地域の気象条件を改善し, 農業の発展を促す試験にも着手するという。

中国のトキ、計17羽に・

黒龍江と吉林にソデグロヅルの大群

〔西安5月21日発新華社=中国通信〕陝西省秦嶺山脈南麓のトキ繁殖地でこのほど、新たに6羽のヒナがふ化していることが発見された。これで中国で確認されたトキの生息数は計17羽となった。

中国では1981年、陝西省洋県で初めてトキの群が発見されて以来、同地をトキ自然保護区に指定するとともに、保護センターを設けて観察を続けている。これまでの観察によると、トキは毎年3月から5月にかけて大きなクリの木などに巣を作り、一度に2~4個の卵を産んでいる。

最近、洋県の姚家溝と三岔河の2カ所の保護地点の管理人が望遠鏡で観察中トキの巣の中でヒナの頭が動くのを認め、さらに、姚家溝の木の下でヒナがかえった後の卵のからが発見されたため、さらに詳しく観察を続けた結果、6羽のヒナがふ化していることが確認されたもの。現在、管理人は引き続きトキの幼鳥を観察するとともに、厳重な保護措置を講じている。

〔北京5月18日発新華社=中国通信〕「光明日報」の5月18日の報道によると、黒龍江省オユル(烏裕爾)河流域と吉林省向海地区で4月中旬に、計578にのぼるソデグロヅルの大群が発見された。この数は、現在世界のソデグロヅルの総数のかなりの部分を占める。

この大群は、黒龍江省野生動物研究所が派遣した貴重な水鳥の航空調査グループが発見したもの。目撃者の話によると、これらのソデグロヅルは沼沢地で自由に食べ水を飲んでおり、最大の群れは300余羽に達したという。

この大群は、毎年4月初め中国南方の越冬地から飛来して1月半の間休憩しているもので、5月中旬に産卵のためさらにソ連に向け旅を続ける。

パミール高原にユキヒョウ保護区・

四川に100頭のターキン・

アルキン山自然保護区で初の学術調査
〔ウルムチ5月22日発新華社=中国通信〕ユキ

ヒョウとアルガリの保護を主とする自然保護区が最近、新疆ウイグル自治区のタシクルガン・タジク自治県に誕生した。

同保護区は新疆西南端のパミール高原にあって面積は1万1500平方キロ、標高は平均3500メートル以上。ここではユキヒョウ、アルガリのほかにアイベックスバーラル、チベットセッケイなど珍しい動物とその生存に欠かせない自然環境が保護されている。

ユキヒョウは中央アジアの高原に生息する大型肉食獣で一年中雪の積もった高原で暮らし、夜間の活動を好み、野生の羊やモンゴルマーモットなどを捕食している。毛は長くて密生し、根元は乳白色だが上端はほぼ青色で、軟らかく美しい。現在、国の第2種保護動物に指定されている。

新疆には、586種の野生動物があり、うち43種が国の保護を受けているが、これは全国で保護されている野生動物の約3分の1に当たる。新疆は16カ所に自然保護区を設けており、うち7カ所は野生動物を保護するものである。

〔成都5月22日発中国新聞社=中国通信〕パンダ保護研究センターのある四川省青川県唐家河自然保護区でこのほど、約100頭の「牛羚」(ウシ科に属するターキン)の群れが集団で活動しているのが発見された。

ターキンは世界の希少動物で、中国では第1種保護動物に指定されている。主に中国の横断山脈からヒマラヤ山脈にかけての一带に分布し、朝夕に活動するのが特徴。

同センターの専門家は「このように大規模な群れは世界でもまれであり、今回の発見はターキンの保護、研究にとって重要な科学的価値をもつ」と高く評価している。

〔ウルムチ5月29日発新華社=中国通信〕中国は新疆アルキン山自然保護区の学術調査を行うことになり、各分野の学者60余人からなる調査隊が5月28日当地を離れ、現地へ向かった。

同保護区は中国西北部最大の自然保護区で、新疆東南部、ウルムチから1000余キロの場所にあり、

広さは4万5000平方キロ。アルキン山脈とコンロン山脈にはさまれた山間の盆地で、平均海拔は4500メートル前後である。

ここの学術調査が行われるのはこれが初めて。きわめて奥深い場所にあるため、目下のところはお無人地帯で、高原の野生動物の絶好の生息地となっている。すでに野生のヤク、チベットロバ、チベットガゼル、雪豹など10余種類の野生動物が発見されており、生物の原始環境が比較的良く保存されて、中国唯一の高原生態系自然保護区となっている。

今回の学術調査には、動物、植物、水文地質、水河、砂漠、気象、地相、土壌、草原など11の研究テーマが含まれている。

扎竜保護区がタンチョウ繁殖の重要基地に、黒龍江省野生動物保護協会発足

〔ハルビン5月26日発新華社=中国通信〕中国黒龍江省の扎竜自然保護区では1976年の設置以来タンチョウ96羽を含む100羽余りのツルの人工ふ化・飼育を行っており、目下中国で重要なタンチョウ繁殖基地になっている。

広さ21万ヘクタールの同保護区には世界に15種類いるツルのうち7種、計400羽余りが生息している。

同保護区におけるツルの保護研究は国際的に注目され、これまでに27の国や地域の国際鳥類専門家、学者、マニア2000人余りが観察に訪れている。同地では現在、国際ツル基金からの第1次科学器材(4万ドル相当)を受けて中国ツル研究センターの建設準備が進められている。

〔ハルビン5月13日発新華社=中国通信〕黒龍江省野生動物保護協会が5月10日当地で正式に発足した。陳雷省長が名誉会長に、張振清省林業庁長が会長に就任した。

同省は野生動物資源が極めて豊富で、陸上せきつい動物は500種にのぼり、うち鳥類は全国総数の32%に当たる374種、獣類は全国総数の21%に当たる87種いる。国の保護動物に指定されているのは

シベリアトラ、ニホンシカ、タンチョウ、ソデグロヅル、コウノトリ、ナベコウ、ヘラジカ、ハクチョウ、オシドリ、クロテン、ノガンなど30余種。

中国に全国的な海洋汚染観測網

〔天津5月18日発新華社=中国通信〕中国の海洋環境汚染モニタリング・ネットワークの設置が、15日まで当地で開かれた全国会議で決まった。

このネットワークは都市農村環境保護省と沿岸の10省・市・自治区および解放軍部隊が参加する全国的な海洋環境汚染観測業務の調整組織であり、渤海、黄海、東中国海、南中国海の4海域を網羅する。

その基本任務は①海域汚染の定時定点観測、汚染源の調査と観測②資料編さん、汚染警報の発令汚染状態の評価③海洋資源の合理的開発・利用のための海洋法規の立案、海域環境の管理と保護、海洋研究へのサービス提供—となっている。

このネットワークは渤海、黄海、東中国海、南中国海にある80の観測所と河口や沿岸にある多数の観測所で構成されている。

光明日報の科学技術関係記事

(以下の記事については翻訳サービスします)

- *活性灰による水銀処理装置開発される。水銀を含む廃水処理の新設備(2.25, 360字)
- *沈陽化工研究院企業の技術改造に貢献(2.23, 980字)
- *陝西など6省市で地方性甲状腺腫病の予防治療に成果(3.27, 360字)
- *マイクロ・コンピューターを熔接技術にとり入れ新成果をあげる(3.22, 470字)
- *宇宙にも生命存在の可能性あり(3.24, 560字)
- *鍼療による鎮痛原理研究新たな成果(3.2, 200字)
- *遺伝工程に新成果、1リットルの細菌培養液から40ミリグラムのインシュリン原タン白の分離に成功(3.8, 350字)